Dominion's Force

b-ryuf-b

○亜細亜・某大国領土内―自治区
　集落から離れた丘の上に、古めかしい石像がある。
　大人の倍ほどあるそれは、自治区の民が信奉する神の象徴だ。
　石像にひざまずくノーレ・ヨドル（女性　４８歳）。
ノーレ「…（一心不乱に祈っている）」
　そびえ立つ石像には、神を模した威厳がある。その顔の一部に、突如ひび割れが生じる。
　驚愕に顔を上げるノーレ。
ノーレ「～（絶望的な呻き）」
　石像の目の下に奔った亀裂は、石像が涙しているようにも見える。
ノーレ「…（言い知れない不安）」
○東南アジア・某国領土内ジャングル
　赤道直下。鬱蒼とした密林地帯。
　内戦中の軍施設付近では、遠い銃声が断続的に聞こえてくる。
　道なき獣道を、音もなく匍匐移動するものがある。２つ。素早い。
　小火器を携えた正規軍の哨戒兵が３名いる。
　しばらく連続した砲声が聞こえたので本隊と連絡を取っている。
　そこへ、茂みの中からマシンガンが放たれる。応戦する間もなく、哨戒兵は全滅する。
　不気味な静寂が漂う。茂みから姿を現す２名の傭兵。
　ジムナール・ヨドル〔ジム〕（男性　２７歳）と、サジーム・タキン〔サジ〕（男性　２９歳）。
サジ「何だ、こいつら」
　哨戒兵らの装備を足蹴にする。全員が旧式の軽装備しか持っていない。
サジ「市街戦か何かと勘違いしてやがる」
ジム「先月、武器庫を壊滅させたからな。もう余力もないんだろう」
　ジムは哨戒兵から武器を奪い、予備弾薬と一緒に身につける。
サジ「どうするんだ、そんなもん？」
ジム「お前も持っておけ」
　サジは不思議そうにそれに従う。通信が入る。合流命令を伝えている。
ジム「急げ。ここが最後らしい」
サジ「くそっ、どんじりかよ」
　素早く指向性ＧＰＳを設置して、敵基地をレーザーでポイントさせる。
　装置を土でカモフラージュして、合流地点へ急ぐ２人。
○同・合流地点〔ランデヴー・ポイント〕～
　ナマイ・シャマラ（男性　３５歳）他、７名の傭兵部隊の隊員たちが待機している。
　通信兵サマリ・ユジン（女性　２２歳）が本隊と通信している。
サマリ「（シャマラに）設置完了です」
シャマラ「撤収準備」
　隊員らは既に野営地を片付けて、痕跡を無煙燃料で焼いている。
　ジムとサジが現れる。シャマラに『全て順調』とサインを送る。

シャマラ「撤収する。巻き込まれるな！」
　即座に移動を開始する。
サジ「誰だよ、予定を早めたのは」
サマリ「雇主の本隊がゲリラに襲撃されて慌てたようです。全機発進したって」
サジ「寝首かかれたか。そりゃ焦るわな」
ジム「…来たぞ」
　上空を見る。爆撃機の轟音が、彼方から微かに響いてくる。
シャマラ「急げ！」
　部隊の上空を爆撃機が通過するのと、開始された爆撃音がほぼ同時に響いてくる。
　ピンポイント爆撃は、正確に基地や施設を轟音と共に完全に破壊していく。
サジ「(奇声を上げる）ざまぁみろ！」
　先行していた隊員（物見役）が戻って来てシャマラに報告する。
隊員「敵本隊が戻ってきてます。この先です」
シャマラ「ヘリは？」
サマリ「第二地点です」
シャマラ「第三地点へ向かわせろ。ルートをＤに変更。先行を代われ」
　変更したルートで移動を再開する。
サジ「陽動部隊の奴らはどうしたんだよ」
サマリ「とっくに逃げたようです」
サジ「あいつらホント使えねぇな」
ジム「(振り返って）お客だ」
　先手を打って森の中へ銃撃を浴びせる。
　敵の本隊が追いすがってくる。応戦してくる銃撃が密林に跳ねる。
ジム「先に行け！」
　殿〔しんがり〕を務めるジム。その横に、サジも残って援護する。
サジ「殿が好きだな、お前も」
　フルオートで撃ちまくる。敵兵が同時に斃れる。ジムとサジの銃撃で敵が近付けない。
　傭兵部隊は後方を２人に任せて撤退していく。敵の数が増える。
サジ「(退がる）キリがねえ」
　サジの援護射撃の間にジムも退がる。交代で銃撃して互いをカバーし合い、徐々に退却していく。
　しかし敵本隊は、数を増やして迫って来る。
　ジムは、敵から奪ったマシンガンを同時斉射して弾幕を張る。
サジ「なるほどな」
　サジもジムに倣い、樹にマシンガンを据え付け、折った枝でトリガーを撃ちっ放し状態にする。
ジム「行くぞ」
　撤退していく２人。敵本隊はその場に釘付けにされる。
○同・上空（ヘリの中）
　飛び去っていくヘリ。見下ろす光景は、作戦が成功し、壊滅した敵の前線基地。
ジム「…（眼下の爆撃跡を横目で見やる)」
サジ「ジム？　どうした」
ジム「いや。何でもない」

シャマラ「俺たちが動かなかったとしても、いずれこの国はこうなってたさ」
ジム「わかってる」
シャマラ「俺たちと、本土との関係、か」
ジム「…やっぱり、自治権だけじゃ限界がある。どうすればイイか、まだわからないけど」
サマリ「…今は、任務をこなすだけ。私はそう考えてます」
サジ「ンなことより、とっとと長〔おさ〕を決めんのが先だろ？」
　ことさら陽気なサジに、苦笑するジム。
ジム「俺は、父さんみたいにはヤレない。やっぱり、シャマラに頼みたい」
シャマラ「(笑) 部隊で手一杯だ。大体、お前を差し置いて長にはなれない」
サジ「意地張ってないで、なっちまえよ」
ジム「簡単に言うな」
サジ「言うさ。何たってお前はあの人の息子だ。しかも、一発必中だからな」
シャマラ「そうだな。一発必中だしな」
サマリ「一発必中って？」
サジ「こいつは戦場で女房と初めての１回をした。そしたら息子が授かった。だから一発必中」
　下ネタは部隊全体を笑いに包む。ふざけて取っ組み合うジムとサジ。
　ヘリは一路、彼らの故郷へ。
○中央アジア某国・軍事統合本部
　厳重な警備網が敷かれている広大な敷地。
　その中に、最新設備の刑務所のような堅牢な建物がある。
○同内・作戦司令室
　報告を受けるロッシ・フォルク（男性　５１歳)。紅茶を持つ手が宙で止まる。
ロッシ「壊滅…か」
部下「(直立敬礼) ピンポイント爆撃によるもの、との報告です」
ロッシ「また、例の自治区の傭兵部隊か？」
部下「(恐る恐る) はい」
　ロッシが紅茶をカップごと投げつける。部下の足元で砕け散る。
部下「ですが、・・恐れながら、あの基地そのものには、さして価値もなく…」
ロッシ「わからんか」
部下「？…と、申しますと？」
　ロッシは口をきくのも面倒だと言うように手を振る。
　部下が退室し、司令室にはロッシ一人だけとなる。
ロッシ「(ブツブツ呟く) 重要性だ？　そんなものどうでもいい、彼奴らが問題なんだ…能無しどもが、ヒトの完璧な作戦をことごとく失敗させやがって…なぜ私の責任に…」
　爪を噛む癖に気づいて余計にいらだち、スクリーンパネルを叩き割る。
　通信を知らせるランプが点滅する。
ロッシ「私だ」
部下の声「司令官がお呼びです」
ロッシ「…すぐ行く」
　立ち上がり、繋がった隣室へ行く。
○同内・個室

　　ロッシが入ってくる。そこはオフィスになっている。
　　控えている秘書役を手招きし、耳打ちするロッシ。
ロッシ「ヤツに連絡を取れ」
秘書「はっ（敬礼）それでは、あれを？」
ロッシ「そうだ。実行に移す。急げ」
秘書「司令官には？」
ロッシ「事後報告でいい。どうせ上の空だ」
　　不気味で不吉な笑みを浮かべて制服を正し、個室を出て行くロッシ。
　　秘書が慌てて暗号コード表をめくる。
○自治区・外観（夕）
　　ジープで帰還する傭兵部隊の面々。
　　ジムたちが、少し懐かしそうに自治区の方角を見つめる。
Ｎ(ナレーション)「ここは、まだ最近形作られたばかりの自治区〔Dominion〕である。二十三の少数民族で構成されており、食料などはほぼ自給自足できる。窪地にある集落は、自然に守られた要塞となっている」
　　ジープを確認した見張兵が、自治区入口の砦のような門を開ける。
　　集落の人々が、傭兵たちの帰還を知って集まってくる。家族や仲間たち。
Ｎ「この自治区を領土内に含む巨大国家は、北の大国と何度も紛争や小規模な戦争を繰り返し、現在に至っている。その状況下で国境に位置する自治区の平和を維持するのは容易ではなかった」
○自治区領内・集落（夕）
　　ジープが停まるや否や、ワッと人が集まってくる。
　　親と子が、兄弟が、恋人たちが再会を喜び、抱きしめ合う。
Ｎ「そこで自治区は独自の軍事力を持った。欧米近代国家の特殊部隊にも引けを取らぬ戦闘能力を誇る傭兵部隊を組織したのだ。その戦闘能力は、時に戦局を左右するとさえ言われ、頼られ、またいつしか恐れられるほどになった」
　　家屋（非常時には防空壕となる造り）の一つから、カナク・ヨドル（女性　２８歳）が顔を出す。
　　息子のコムド・ヨドル６歳を連れて、ジープの方へ駆け出す。
　　車を降りたジムと、妻カナクが抱き合う。途端に沸き起こる歓声。
　　ジムは、皆に注目されて照れるが、カナクとコムドを強く抱きしめる。
Ｎ「今や自治区の経済は彼らに依存しており、傭兵たちは民の誇りと憧れとなっている。そして、亡き族長の息子ジムナールが所属するのは、９人編成９部隊の中でも精鋭の兵を揃えた九龍〔クーロン〕隊である」
　　ジムたち親子は部隊の仲間に手を振り、家へと足を向ける。
カナク「お帰りなさい」
コムド「パパ、パパ」
ジム「ただいま」
　　サジが冷やかしの口笛を鳴らす。
サジ「ジム！　家じゃお前よりカナクの方が長なんじゃないか？」
ジム「ばか、最高機密を簡単にバラすな」
　　皆が笑う中、サジは母シャオ・タキン６２歳に小言を言われている。
　　子供から妙に人気者なサジは、シャオと子供らに囲まれている。
シャオ「足を引っ張っとらんじゃろうな？」
サジ「あのなお袋。もうちょっと息子を信用しなさいっての」

そこへ、いきなり現れたドブレ・ワヒリ（女性　１９歳）がサジの頭を叩く。
サジ「いってえ。何すんだよ？」
ドブレ「（勝気な目）すぐに無事を報告するって約束したよね？　したよね？」
サジ「ん？（忘れてた）そう、だったっけ？」
ドブレに詰め寄られて言い負かされ、皆に笑われるサジ。
ドブレは他の子供たちから「先生」「せんせ、遊ぼ」と慕われている。
シャマラは、残留隊との打ち合わせをしている（家族はいない）。
サマリは、装備と機材を点検して、すぐ兵舎（見張塔の足元）へ向かう。
何人かは哨戒任務を交代し、傭兵たちは持ち場や家へと散っていく。
戦場ではあるものの、ひと時の平和な光景だ。
○同内・訓練場（夕）
少年兵たちが訓練を受けている。ＡＫタイプの小銃での実射訓練。
教官（まだ十代）の合図で土埃と共に板の標的が立ち上がり、伏した少年たちが銃身を引きつけて撃つ。
ジェイコブ・ヨドル〔ジェイ〕（少年　９歳）もその中にいる。真剣な眼差しで標的を撃ち抜く。
ジムが息子の様子を見に現れると、教官が緊張気味に敬礼する。
ジム「気にせず続けてくれ。見に来ただけだから」
ジェイ「父さん！」
勢い良く父親に抱きつく。いかにもまだ子供、といった感じだ。
ジェイ「お帰りなさい、父さん」
ジム「腕を上げたな」
ジェイ「（嬉しい）僕は筋(すじ)がいいそうです」
ジム「頼もしいな。その分なら、家の守りは安心だ」
ジェイ「（不満）僕は早く実戦に出たいです」
ジム「おいおい」
ジェイ「父さんが初陣した歳まで、あと２年ですから」
ジムが「やられた」という顔をすると、ジェイも楽しそうに笑う。
教官が傍に来て敬礼する。緊張と憧れとが、その顔に浮かんでいる。
教官「この度の作戦成功、おめでとうございます」
ジム「（敬礼）ありがとう」
教官「（ジェイに）本日はここまで」
ジェイも敬礼し、銃を戻しに武器庫へ行く。教官はジムに向き直る。
教官「私は、あなたこそが長に相応しいと信じています。どうか、一日も早く」
ジム「（馴れっこだが、苦笑）・・ありがとう」
装備を片付けて戻ってきたジェイと一緒に帰って行くジム。
教官や少年兵たちが敬礼で見送る。
○同・町中（～夕闇）
森の彼方で夕陽が落ちていく。ジムとジェイ父子が歩いている。
ジェイ「お仕事は？　どうだった？」
ジム「何とかな」
ジェイ「父さんは強い。実力で戦士になった。みんなそう言ってるよ」
ジム「お前たちがいるからな。じゃなきゃ、とっくに逃げてたよ」

ジェイ「（驚く）そうなの？」
ジム「守るって気持ちが人を強くするんだ。俺も、俺の父さんに教わったことだから」
　感心するジェイに笑いかける。
　ふと、道の前にシャオが立っているのに気づく。ジムに話があるようだ。
ジム「すぐ帰る。先に行っててくれ」
　ジェイは頷いて走っていく。ジムはシャオに招かれるまま、近くの家に入っていく。
○同・屋内
　ジムが入ると、シャオの他にも数人の老人たちがいて、ジムに礼をする。
　ザワついていた雰囲気は消し飛び、無言の深刻が漂う。
シャオ「どうぞ、そちらへ」
　全員が腰を降ろし、向かい合う。
ジム「…（予想していた事態）それで？」
シャオ「もう、いいじゃろう。心を定めても」
ジム「俺は、シャマラを推したはずですが」
シャオ「悪くはないじゃろう。才もある。しかし、一番大事なことを忘れてはいかん」
ジム「…」
シャオ「ガイ様がお斃れになられて早や５年…皆よく頑張った。それもみなジムナール、あなたの成長を待てばこそのこと」
ジム「まだまだですよ」
シャオ「ではいつか？　お聞かせ願いたい」
ジム「…（かなり苦手な議論だ）」
シャオ「子供らへの教育も、兵の組織や訓練にも力を注いでおられる。この自治区の将来のため、と。ならばなぜ、長を名乗ることだけ固辞なさるのか？」
ジム「俺が族長ガイの息子だからです…答えになってないかも知れませんが」
　堂々と構えるジムに、誰も意見を差し挟めなくなっている。
　そこへ、突然サジが陽気な顔を覗かせる。
サジ「やあやあ皆さん、おそろいで　（ジムに）おいジム！　何やってんの、探したぞ」
　戸惑う皆の前に割り込み、強引にジムを引っ張り出して連れ去るサジ。
シャオ「待たんか、このバカ息子！」
　表ではジムとサジが走って逃げていく。
○同・町中（夜）
　広場まで走ってきて、ホッと息をつくジムとサジ。
　ジムはため息のように大きく息を吐く。
サジ「ホントしつこいな、お袋も」
　隠し持っていた葉巻をジムに渡す。
サジ「特別製だ。みんなには黙っとけ」
ジム「（笑って懐にしまう）臭いでバレる」
　サジの分をナイフでカットしてやる。サジが旨そうに葉巻を吸う。
サジ「（ナイフを見て）親父さんのだな」
ジム「…形見になった」
サジ「ま、しょうがねえよ。自治区をまとめあげたのも、傭兵組織なんて代物を作り上げたのも、全部お前

の親父さんだからな」
ジム「俺は…血統だけで首領を決めるべきじゃないと思ってる」
サジ「理想はそうかもな。ただよ、俺もあんな親父がいて欲しかったと思ったもんさ」
ジム「…（複雑な嬉しさ）」
サジ「お前はいい家族を持ったよ。なれるんじゃねぇか？　親父さんみたいな凄ぇヤツによ」
ジム「お前はどうなんだ？　ドブレと」
サジ「そろそろ、かもな。しかしよ、カカア天下になっちまうかな」
ジム「家の中じゃ、その方がいいんだよ」
サジ「嫌だね俺ァ。ま、お前の女房は元々が部隊の腕っこきだったからな。今でもお前より強ぇんじゃねぇのか？」
ジム「（トボけて）そうだったか？」
　丁度、広場の向こうから、ドブレがサジを呼ぶ声がする。
　サジは肩をすくめて葉巻を消し、裏手に隠れる。
　ジムの前に、ドブレとサマリがやってくる。
ドブレ「ジムさん、サジを見なかった？」
ジム「さぁ。どうかしたの？」
ドブレ「食事の約束すっぽかして。ったく、あのバカ」
　サジは傍に隠れて、必死に声を殺す。
サマリ「（臭いを嗅いで）葉巻ですか？」
ジム「貰ったんだ。先生の未来の旦那から」
　ドブレは赤面し、誤魔化すように、
ドブレ「やめてください、ジムさんまで。私なんか、そういうの向いてないし。カナクさんみたいに素敵になれたらいいけど」
ジム「お似合いだと思うんだがなぁ」
ドブレ「（ムキになって）冗談じゃないですよ。誰があんなオタンコナスと」
　サジがいきなり顔を出す。
サジ「誰がオタンコだ！　このヒステリ女」
　ドブレは一瞬驚くが、すぐ怒って追いかける。逃げるサジ。笑うジム。
○ジムの家（夜）
　一家４人が並んで寝ている。
　横でジェイが寝息を立て、ジムとカナクの間にはコムドが丸まっている。
ジム「天使だな、まるで」
カナク「そう。アタシたちのためだけにいる、天使よ。この子たちは」
　ジムはコムドの頭を撫で、カナクの髪をほぐすように触る。カナクがコレをやると喜ぶのをわかっている。
カナク「（微笑む）今度は、どれぐらい？」
ジム「クーデターは収まったけど…長くは保たないだろうな。また起こる。近いうちに」
カナク「…（心配そうにジムを見つめる）」
ジム「どっちが正しいとか、わからない…ただ俺たちが戦いを辞めたとしても、この世界から戦いはなくならない。絶対に」
カナク「うん…そう、だね」

ジム「俺は俺の信じる道を行きたい。お前たちを、我が民族が受け継いだ大地を、みんなを護るためなら喜んで戦う。父さんがそうしたように」
　カナクは、ただジッとジムを見つめる。
ジム「(照れを隠すように）でも、おかしなモンだな。家に居る時以外は、戦場にいた方が気が休まるなんて」
カナク「(笑い）サジのお母さん、だいぶしつこかったみたいだね」
ジム「(思い出す）５年、か」
カナク「あなたは変わった。すべてにおいて」
ジム「？」
カナク「父親が偉大で、いつも彼の息子として見られて、だからいつも必要以上に気を張ってて。戦うことそのものに固執して、誰も寄せ付けない感じだった」
ジム「(当たっている、と苦笑)」
カナク「おぼえてる？　ジェイが生まれてから初めての出撃。あの時、あなた震えだして。そしたら義父さんが―」
ジム「あぁ。『これでわかったか？』、って」
カナク「あれから　―　あなたは本当に変わった。戦士としても、父親としても」
　子供たちを見やる。
カナク「アタシは、あなたを誇りに思う」
　ジムと額を合わせ、口づけする。
カナク「…ごめんね、義母さんのこと」
ジム「カナクのせいじゃない。まだ父さんのことを引きずってるだけなんだ」
カナク「お祈りに行くと、３日は戻らない」
ジム「やっぱり、俺たちの戦いそのものに反対してるんだな」
カナク「本当は、もっとちゃんと話したい」
ジム「まだ、時間が足りないのかも知れない」
　少し落ち込むカナクの鼻を突っつく。
ジム「大丈夫。俺たちにはまだまだ時間がある。わかってもらえる。きっと」
カナク「うん」
ジム「完全な独立権を勝ち取る。こいつらが戦場に行かなくたって済むように。そのためなら、俺は何だってやれる」
　夫に全幅の信頼を寄せるカナクの目。
　コムドがムズがってカナクにしがみ付く。夫婦は笑って子供たちを抱き寄せる。
○同・石像の丘（朝）
　集落中の人々が集まっている。石像（の亀裂）を見て騒いでいる。
　ジムとカナクも、サジに連れられてやって来る。皆の視線がジムに集まる。
ジム「(石像に驚く）これは？」
　石像の足元に、シャオが止めても祈りを続けるノーレの鬼気迫る姿がある。
ジム「母さん！」
　ジムに揺すられ、ようやく動きを止めるノーレ。意識が朦朧としている。
ジム「母さん！　しっかりしてくれ、母さん」
カナク「お義母さん！」

シャオ「ジムナール。これは一体？」
ノーレ「（かすれ声で）終わる…大地が、死ぬ」
ジム「なに言ってるんだ？　母さん」
　ノーレが石像へすがるように手を伸ばす。
ジム「御神体のこと、なのか？」
　ノーレがふいに気を失う。ジムは慌ててシャオやカナクに指示し、ノーレを診療所へ連れて行かせる。
　集落の皆に動揺が広がってゆく。
サジ「（石像が）まるで泣いてるみてえだな」
ジム「あぁ…」
　麓からシャマラがやって来るのに気づく。険しい顔付きをしている。
ジム「隊長、どうした？」
サジ「見たか、コレ？」
シャマラ「あぁ。（ジムに）来てくれ。仕事だ」
ジム「（怪訝に）あぁ」
　シャマラについて行くジム。ふと振り返り、石像を見やる。
○同・部隊基地本部（朝）
　シャマラとジムが入って来ると、待っていたユン准将（男性　４４歳）が、満面の笑みで近づいてくる。
ユン「ジム！　会いたかったよ、やっと会えた、待ってたよ、さぁさぁこっちこっち」
　戸惑うジムを席につかせる。強引で、むやみにテンションの高いキャラクターだ。
ユン「久し振りだねぇ、元気だったかい？」
ジム「えぇ、准将もお変わりなく（苦手意識が顔に出ている）」
ユン「ユンでいいと言ったろう。他人行儀なのは嫌いなんだ」
シャマラ「（冷静）准将、ビジネスのことを」
ユン「やれやれ、隊長はお堅いし、隊員は生真面目ばかりだ。ゆとりを持とうよ君たち」
ジム「（苦笑）感謝してるんですよ。ユン、さんの理解がなければ、資金も物資もままならないのをよく知ってるんです」
ユン「（大袈裟に感心）奥ゆかしいことだね」
　芝居がかった仕草で地図を取り出す。東南アジアの一角を指し示す。
ユン「さて、ココに何があるかは承知だろう」
シャマラ「捕虜収容所、ですね」
ユン「君らと違って徴兵制なのでね、間抜けも多いんだ、ウチには。その１人が見事にとっ捕まって、今ココにいる」
ジム「潜入工作専門の人間、ですか？」
ユン「本来なら口を封じて然るべきなんだが、そうもいかなくってね」
シャマラ「というと？」
ユン「リークされちゃって、議会が騒ぎだしてね。まぁ表向き不可侵条約があったから無理ないんだけど。とまあそんな訳で、正規軍は出せない」
ジム「ここの半径２以内の衛星写真は見れますか？」
ユン「（大喜び）そうこなくっちゃ！　ありがとうジム。大好きだよ」
　ユンに寄り付かれて、苦笑するジム。
シャマラ「（ジムに）急いだ方がいい。皆に伝えてくれ。待機手配は俺がやっておく」

ジム「わかった。それでは」
　　敬礼して出て行くジムを、ユンが手を振って見送る。
　　ドアが閉まると、ユンの顔が狡猾に豹変する。
ユン「さて…任せたよ。君に期待している」
シャマラ「…（目を合わさないように）」
　　ユンは、頭を下げるシャマラを見下ろし、楽しそうに含み笑う。
○自治区領土内・補給基地（夕）
　　森林の中の開けた土地に、粗末な建物。
　　大国籍の軍用補給機が、物資を降ろし終えて離陸していく。
　　準備を終えたジムら九龍隊の面々が、家族たちとの別れをしている。
　　家族のないシャマラやサマリは、装備の点検や打ち合わせに余念がない。
　　サジはドブレにハッパをかけられ、母には小言を言われている。
　　ジムは、カナクとコムドを抱き締め、ジェイの頭を撫でてやる。
カナク「（ジムにしがみつく）待ってる」
ジム「すぐ戻る。母さんのこと、頼む」
カナク「うん…（目が潤む）」
コムド「パパ、バイバイ」
ジム「（ジェイに耳打つ）わかってるな？　もし何か良くないことが起こったら」
ジェイ「うん！　地下か、広場に」
ジム「みんなを頼むぞ、ソルジャー」
ジェイ「（誇らしく頷く）はい！」
　　集落の人たちからも無事を祈る声をかけられ、それに応えるジム。
シャマラ「時間だ。行こう」
　　部隊が出発する。見送る人々、戦場へ赴く者たちが手を振り合う。
サジ「残念だったな、３人目を仕込む時間がなかったろ？」
ジム「いいや、今度は絶対に女の子だ」
　　部隊内が冷やかしの野次で笑いに包まれる。
　　ピクニックでも行くように、傭兵たちは去って行く。
カナク「…（漠然とした不安）」
○診療所
　　ノーレが独りベッドにいる。虚ろな目。
ノーレ「（祈りの呟き）神よ・・お許しを…」
○密林地帯上空を低空飛行する輸送ヘリ
○武装区域～捕虜収容所
　　高温多湿の密林を進む九龍隊。
　　先行するサジが、ブービートラップや地雷を巧妙に解除して先導している。
　　シャマラが一旦の小休止を命じる。
　　入手した衛星写真と、それを元にした見取図を広げ、最終確認をする部隊。
サジ「（写真を見て）警戒は厳重だな」
ジム「だが、本隊じゃない」
サジ「あぁ。配置が散漫だ」

サマリ「裏の岩山には隠れられる場所が一切ありません。こちら側から行くしか」
シャマラ「個々に潜入する。地形をもう一度頭に叩き込んでおけ」
　全員が装備を確認する。ふと気づくと、シャマラは物言いたげにジムを見つめている。
ジム「どうした、シャマラ？」
シャマラ「…いや、いい。（皆に）散開！」
　２人ずつ四手に別れる。ジムはサマリを連れて、茂みへ突き進んで行く。
シャマラ「……」
　密林を駆け抜けるジム。
　常人離れした動きだが、サマリも身軽さでは引けを取らず、ジムについて来ている。
　高圧電流と直結した有刺鉄線の壁。
　ジムとサマリは壁の手前で停まり、電子双眼鏡で収容所の様子を窺う。
ジム「？…人が、いない」
サマリ「そんな…あの写真は、ほんの３時間前のモノじゃ？」
ジム「…（考える）行こう」
　有刺鉄線を切断し、絶縁体の隙間を潜って収容所へと潜入する。
　岩山の方角を目指す２人。
　兵士の詰め所の一つを窺う。だが、気配も物音も一切しない。
ジム「…（慎重に中を覗く）」
　誰も居ない。散らかった室内は、突如として人間だけが消えたようにも見える。
　周囲を警戒するジム。
サマリ「まさか、本当に無人なのでは？」
ジム「情報が根本的に間違ってたのか、それとも察知されたか…どっちにしても、嫌な感じだ」
サマリ「あの噂…関係あるんでしょうか？」
ジム「何のことだ？」
サマリ「前の第三隊の時に敵兵から聞いたんです…新型の生化学兵器の実験が、成功したらしい、って」
ジム「BCW？　どんな？」
サマリ「わかりません。でも、人間にだけ効果があるとか…国を１つ滅ぼせるだけの威力がある、とも」
ジム「本当にそんな兵器があったとしても、核と同じで抑止力にしかならない」
　牢の方へ向かう。サマリも疑念を払拭するように首を振り、ジムに続く。
○同・牢
　入口から中を窺うジムとサマリ。やはり人の姿も気配もない。
　ジムは通信機を使わせようとするが、サマリが『無理だ』と首を振る。
サマリ「妨害電磁波〔ジャミング〕がひどくて」
　奥へ進むジムたち。通路の向こう側から誰か来るのに気づき、岩陰に隠れる。
ジム「…（慎重に小石を投げる）」
サジ「（合図に気づく）ジムか？」
　サジたち（２名）と合流した。背後を警戒しつつ、更に奥へ進む。
サジ「ここに入ってから生き物を見かけてねえ。きな臭いなんてモンじゃねえぜ」
　サジに同意し、慎重に進むジム。
　死角の向こうに檻があるのを確認する。全員、包囲態勢のまま飛び出す。
　檻は暗く、中が見えにくい。

ジム「？…誰かいる」
　　檻の一番奥。その隅に、背を向けて縮こまっている半裸の男がいる。
　　薬物中毒のように痩せこけ、震え続けていたその男が、振り向く。
サジ「！（気づく）テメェ」
　　その男、フェランキ・ザカル（１８歳）の震えが停まり、驚愕の表情を浮かべる。
　　サジは檻を開けると真っすぐフェランキに詰め寄り、引っ張り上げる。
サジ「おい！　テメェ、何でこんなとこにいやがる？　何があった？　おい！」
　　興奮するサジを抑えるジム。
　　フェランキは、身体に力が入らないままおびえている。
サマリ「誰、なんです？」
ジム「元々は自治区の人間だ。大分前に出て行ったんだが」
サジ「ドブレにちょっかい出しやがったんだよ、このガキ！（殴りかかる）」
ジム「落ち着け、サジ！」
　　サジは怒りを堪えて、渋々フェランキを離す。
　　振動が伝わってくる。何かの爆発だ。外へ出て確認するジム。
　　岩山の麓。電波塔が破壊されている。サマリの通信機が鳴る。
サマリ「こちら MOLE…（ジムに）隊長です」
ジム「（無線に）どうした？」
シャマラ（無線）「捕虜はいない。爆薬が仕掛けられてる。そっちはどうだ？」
ジム「檻に一人。だが、捕虜かどうかは不明」
フェランキ「アンタら・・何でココに？」
サジ「こっちが訊いてんだ、テメェに！」
シャマラ「脱出した方が良さそうだ。急げ」
フェランキ「実験、始まっちゃうよ」
サジ「テメェ、訊いたことに答えろ！」
ジム「待て。（フェランキに）実験とは？」
フェランキ「細菌…自治区に、バラまく、言ってた…」
サマリ「BCW？　まさか、新型の…」
サジ「おい、何のことだ？」
ジム「自治区・・俺たちの自治区にか！？」
　　虚ろに笑うだけのフェランキを突き飛ばし、外へ向かうジム。追うサジ。
　　サマリたちも、フェランキを連れて脱出する。遠くで爆発が起こっている。
○山岳地帯（自治区）へ向かう輸送ヘリ
　　手当てを受けているフェランキを、憎々しげに見やるサジ。
　　操縦士を急かすジムを、シャマラがたしなめる。誰もが焦りを隠せない。
○地上～ジープに乗り換える九龍隊
○山道～
　　速度を上げる２台のジープ。その先頭が、突然地雷の爆発で横倒され森に突っ込む。
　　急停止して周囲を警戒するジムたち。倒された車から、サジたちが顔を出す。
ジム「…（銃口で周辺全体を見回す）」
　　ひとけはない。森は静寂そのものだ。

　サジたちは全員軽症で済んだらしく、辺りを警戒しながら外へ出る。
サジ「どうなってんだ？」
シャマラ「自治区へのルートが押さえられたんだ。恐らく、待ち伏せがある」
ジム「（同意する）まだ繋がらないのか？」
サマリ「逆にジャミングが強くなってます」
サジ「何だよ、待機部隊はどうなった？」
サマリ「まさか、もう…」
ジム「通常ルートは全部避けよう。Ｇルートを廻り込めば、察知されず行ける」
シャマラ「よし。ジム、先導を頼む」
　ジムを先頭に、森へと突き進んでゆく。
　その背後を窺う何者かの視線がある。
○森の中〜窪地
　慎重に、だが最速で移動する九龍隊。そこへ突然の銃声。
　全員が伏せて応射する。
シャマラ「撃ち方やめろ！　どこからだ？　方角は？」
　極度の緊張状態のまま、周囲を警戒する。
ジム「〜（焦り、目を閉じる）」
　カナクの笑顔、ジェイの笑顔、コムドのあどけない寝顔が次々と浮かぶ。
　目を開け、匍匐で移動するジム。だが、急に止まる。
　目の前にある土を銃口でそっと掘り返すと、そこに地雷が設置されている。
ジム「（振り返る）動くな！」
　しかし、離れて歩いていた隊員が、ブッシュに巧妙に仕掛けられたピアノ線（ブービー・トラップ）を脚に
　引っ掛けてしまう。
　と同時に、浮遊地雷が飛び跳ねて、空中で炸裂する。至近距離にいた２名が、直撃を受けて死ぬ。
シャマラ「散開！」
　ジムは、浮遊地雷の破片が当たって火薬で穴が空いた防弾ベストを脱ぎ捨てる。
　軽装になって木陰へ身を隠すジム。サジたちもそれに倣う。
サジ「何でだ！　何でここにも罠が？」
ジム「（必死に息を殺す）動きが…読まれてる」
　森の中に何も動きはない。だが、ジムたちは動きを封じられている。
　サマリが熱反応可視装置（サーモグラフ・スコープ）で前方を監視する。人影が樹間を横切る。
　ジムとサジが同時に反応してマシンガンを連射する。全員の一斉応射。
　静寂。手応えはない。
フェランキ「（恐怖に叫ぶ）ぎぁああ！」
　フェランキに銃口を向けるジム。
　フェランキの元へ駆け寄ると、別の隊員が２名、頭蓋を銃で撃ち抜かれて死んでいる。
ジム「ばか、な…」
サジ「何だ・・何なんだ…何なんだよこれは！」
シャマラ「固まるな！　散開しろ！」
　立ち尽くすジムの背後で何かが光る。

　シャマラが飛び出す。ジムの盾となる形で、シャマラが銃の連射を浴びて斃れる。
ジム「シャマラ！！（必死に伏せる）」
　全員の応射。敵の姿は全く見えない。
サマリ「そんな…隊長…」
ジム「シャマラ！　しっかりしろ！」
シャマラ「（喉を撃ち抜かれて声が出ない）」
　口が「済まない」と動いて、シャマラが絶命する。
　ジムは喉からせり上がってくる嗚咽で声が出ない。
　しゃかりきに、頭を撃ち抜かれた隊員の死体を調べる。
サジ「（戸惑ったまま）ジム？」
　ジムは死体の弾痕箇所を調べて、ふいに気づく。頭上を見上げる。
ジム「離れろ！（頭上、樹の上を撃つ）」
　全員が頭上へ銃を向ける。
　樹上から矢と銃弾が降り注ぐ。また１名、隊員が撃ち殺される。
　ジムは撃って撃って撃ちまくる。
　サジもサマリも、ありったけの弾丸を樹上に撃ち込む。
　数人の敵が、殺されて樹上から落ちてくる。
サジ「？！…こいつら？」
ジム「ッ…（荒い息をついて死体を見る）」
　それは知っている顔…自治区の仲間…友の死体だった。
サマリ「待機…部隊…（愕然）」
サジ「（グラつく）じゃあ…今まで、自治区の仲間同士で殺し合ってたってのか？」
　ジムは、物陰で縮こまっているフェランキを引っ張り起こす。平手打ち、
ジム「何を知ってる？　他に何か知ってることがあるだろう？　話せ！」
　激しく揺さぶると、フェランキは正気に戻ったように目を見開く。
フェランキ「細菌が、前頭葉と…大脳新皮質…食い殺す…洗脳…ロボットみたいに…」
サマリ「細菌が、前頭葉を…」
サジ「何だ？　どういうことだ？」
サマリ「前頭葉除去〔ロボトミー〕手術の応用かも…大戦時にナチが行った、完璧な洗脳を可能にする実験…人間から理性や知性、恐怖心を奪い、どんな暗示でも受け入れる兵士に改造する…」
サジ「その、細菌ってのが、同じ働きをするってのか？　その馬鹿げた手術と？」
ジム「暗示…仲間を殺させることも、か？」
サマリ「…（恐る恐る、頷く）」
　怒りと絶望に震えるジム。背後の気配に気づいて、振り返りざま撃つ。
ジム「！…（動けなくなる）」
　一瞬見えて、すぐ隠れ逃げた人物は、ジムの妻カナクの姿をしていた。
ジム「・・・・・（信じられない）」
サジ「まだ部隊がいるのか？」
サマリ「ウチを除く全部隊が自治区に戻ってたはずです。シャマラ隊長が指示を・・」
サジ「ジム？　どうした？」
ジム「（茫然）カナク…」

サジ「何？」
　ジムは突き動かされるように走り出す。サジとサマリも追いかける。
フェランキ「…みな、ご、ろし」
　夢游状態のまま、シャマラたちの屍にもたれて眠るフェランキ。
○自治区内・集落
　大気は薄黄色い霧がかかった状態。
　門の見張兵が殺されているのを確かめるサジとサマリ。鼻と口に布を当てる。
サジ「もうここ一帯に蔓延してんのか？」
サマリ「…（ジムに気遣い、頷く）」
　見ると、ジムは身体を震わせて、はやる想いに耐えている。
サジ「…（布を差し出す）ジム」
　サジの手を撥ね返すジム。
サジ「ジム…助けるんだ。俺たちでみんなを助けるんだ、そうだろ！？」
ジム「ドブレが襲ってきたら・・」
サジ「！」
ジム「もし、惚れた女が襲ってきたら、お前撃てるのか？　なぁ、サジ」
サマリ「…（息を呑む）ジム、さん」
　ジムを睨むサジ。怒りと迷いにうめき、ジムにつかみかかって叫ぶ。
サジ「じゃあお前撃てんのか？　カナクだけじゃねえ、ジェイや、コムドのこと撃てるってのかよ！」
ジム「俺を撃った方がマシだ！　だから聞いてるんだろうが！」
　組み争う２人にサマリが割って入る。震える手で、２人に銃を向ける。
サマリ「頭を、冷やして」
　２人の男は力を抜いて、気を静める。
ジム「…行くしか、ない」
サジ「どうすんだ？　作戦は？」
サマリ「確か、武器庫に麻酔銃が」
ジム「忘れるな。俺たちの動きは読まれてる」
サジ「行くしかねえんだろ。俺は行くぜ」
サマリ「行きましょう」
ジム「よし。いいな？　最悪の場合は―」
サジ、サマリ「（同時に）広場に！」
　頷くジム。石をつかんで投げる。表の通りに転がる数個の石。
　銃撃も地雷もない。３人は素早く移動して町に入り、建物の陰に隠れる。
サジ「…（上方を警戒する）」
サマリ「…（背後を警戒）」
ジム「（行手前方を見据えて）・・行くぞ」
　カバー・フォーメーションを崩さず、全方位警戒態勢で素早く移動する３人。
　家屋の中を窺うジム。誰もいない。荒らしたような跡がある。
　移動する。武器庫が見えてくる。サマリが電子双眼鏡で確認する。
サマリ「誰もいません。かなりの武器が持ち出されています」
サジ「麻酔は？　あるか？」

サマリ「ここからではわかりません」
ジム「（サマリに）援護しろ」
　建物の影から、サジと共に飛び出すジム。途端に銃弾の嵐が降ってくる。
　サマリのマシンガンが弾幕を張って、ジムたちの進路を開ける。
○同・武器庫内
　ジムが入るなり外へ応戦し、サジは中を警戒し見て回る。窓を閉じ、明かりをつける。
サジ「クリア！」
　ジムが表を閉めてやってくる。すぐに麻酔銃を探し始める２人。
　ロッカーに駆け寄る。サジが扉を開けようとした時、ジムは異常に気づく。
ジム「待て！」
　扉の裏を慎重に辿る。全ての扉に仕掛けられたコードはＣ４爆薬と直結している。
ジム「頼む」
　サジが器用に仕掛けを解除する。
　床の隅にある地下への隠し扉が、音もなくゆっくりと開いていく。ジムとサジは気づかない。
　扉の中には麻酔銃と、薬を注入する特殊な弾丸が揃っている。
ジム「（通信に）あったぞ。麻酔薬の量は大丈夫なのか？」
サマリの声「猛獣用ですが、人間の致死量ではない筈です」
　ジムとサジは麻酔銃の装備を確認し、ポンプ式で麻酔弾を装填する。
　その背後で、隠し扉から顔を出したシャオがライフルを構える。
ジム「（気づく）サジ！」
サジ「チッ（銃を構えて、止まる）！？」
　恐ろしく無表情な母親（シャオ）と、その息子が互いに銃口を向け合う異様な状況。
　ジムが麻酔銃でシャオを狙うが、横からサジに押される。
サジ「（自分が狙う）お袋！」
　シャオと同時に撃つ。
　サジの狙いは外れる。
　ジムはサジを庇って壁へ押しやる。窓の外を窺うジム。
　シャオの銃撃はＣ４の配線に被弾する。
ジム「！」
　サジが母を守ろうと駆け出す。Ｃ４が起爆する。
○表
　窓から爆風に吹き飛ばされ、外へ飛び出すジム。何とか態勢を直して武器庫に駆け寄る。
ジム「サジ…サジ！」
　向かいの建物から銃撃が襲ってくる。必死に壁際を這い進んで建物裏に隠れるジム。
　通りに落とした麻酔銃を拾おうとするが、銃撃が激し過ぎて手が出せない。
サマリ「ジムさん！（援護射撃する）」
　ジムは武器庫の窓から中へ呼びかける。
ジム「サジ！　サジ、返事しろ！」
　返事はない。代わりに、別の方向から手榴弾が飛んでくる。
　ジムは慌てて石段に身を隠す。頭上で爆発が起こり、銃撃が襲ってくる。
　やむなくその場を離れるジム。通りを駆け抜け、一番近い建物に入って身を隠す。

サマリ「ジムさん！（通信機が通じない）サジ！　応答してサジ！　ジム…サジ…」
　通りを見る。ジムの落とした麻酔銃が落ちている。
サマリ「…（ためらう、が、決意する）」
　銃撃がきた場所へ空中爆破のタイミングで手榴弾を投げ、一気に走るサマリ。
　何とか麻酔銃を手にして武器庫に取り付き、サジの姿を探す。
　その瞬間、後ろから撃たれるサマリ。
サマリ「！…（吐血し、斃れる）」
　死に物狂いで振り返って銃を向ける。そこにいたのは、友人の無表情な顔。
サマリ「ドブレ…」
　ドブレは躊躇なく銃槍でサマリの心臓を貫く。サマリが絶命する。
　そのドブレがマシンガンの連射を浴びて死ぬ。
　銃撃は、脚を吹き飛ばされて武器庫から這い出てきたサジのもの。
サジ「ド、ブレ…」
　サジの両脚は千切れて失われている。手だけで這いずってドブレにしがみ付く。
　既にドブレの身体は銃痕と血に塗れ、死後痙攣を止めている。
サジ「一緒に、なって…くれ」
　ドブレの屍体にすがりつき、泣きながら笑う。
サジ「やっと、言えた」
　力尽きたサジ。その脳天を、通りに姿を現したジェイが撃ち抜く。
　サジの眼球が脳漿と共に飛び散り、身体がピクピクと痙攣する。
　その痙攣が徐々に収まっていくさまを、ジェイの無表情な目がジッと観察している。
ジェイ「…（一切の感情はない）」
　まるで飽きたように歩き出すジェイ。
○屋内（～夕）
　荒い息をついて外を警戒するジム。頭痛に顔をしかめて眉間を押さえる。
ジム「（鈍痛に苦しむ）何だ、頭が…？」
　ふと、そこが自分の家だと気づく。
　衝動的に戸棚を探り、プラグ接続用の金具とスイッチを見つけ出し、ポケットにしまう。
　その時ふと、影になった部屋の隅にいる人影を見る。即座に銃口を向けるジム。
ジム「（恐怖を感じている）誰だ？」
　応答はない。人影はただ立っている。
　ジムは、微動もしない人影にライトを当てる。
　そこには、ノーレが自分で胸を突き刺し、立ったまま絶命した姿がある。
ジム「（絶望）母さん…」
　力なく立ち上がろうとして、扉の外の気配に気づく。
　恐怖から、反射的に銃を連射するジム。気づかず、獣のように叫んでいる。静寂が訪れる。
ジム「…（不安と違和感）？」
　扉が開く、と同時にコムドがナイフを手に突進してくる。
　コムドの身長では、ジムの銃撃が当たっていなかった。ナイフは、ジムの脚に突き刺さる。
ジム「（ただ喜ぶ）コムド！」
　刺されたことなど無視して、コムドを抱き締める。

ジムの目には、天使のような笑顔の我が子を腕に抱き締めている情景が見えている。
だが実際は、コムドは狂気に取り付かれたようにわめきながらジムの腕の中で暴れ、父親に噛み付いている。その表情は、小鬼〔グレムリン〕の如く悪意に満ちている。
ジム「さ、おばあちゃんにオヤスミ言おうな」
現実逃避したままのジムは、暴れるコムドを押さえつけ、ノーレの方へ行く。
そのノーレの身体にはピアノ線〔ブービートラップ〕が仕掛けられている。
だが、ジムは気づかずにノーレの死体を動かす。
壁に仕掛けられた指向性地雷が、垂直に飛び跳ねて爆風を浴びせる。
ノーレと共に吹き飛ぶジム。腕の中のコムドは息をしていない。偶然にもコムドが盾となった形だ。
ジムは、ノーレの肉片や破裂した内蔵を浴びながらも、まだ生きている。
ジム「…（目の焦点が合っていく）？」
ゆっくりと、コムドを見つめる。死んでいる。
飛び散った肉片が母親のものだ、とようやく理解する。
ジム「ああああぁぁぁぁぁぁぁ！」
正気と狂気の狭間で、絶望の叫びがしぼり出される。
ここまで耳に不快な音がこの世にあるのかと思えるほどに…
ジム「！（正常な思考は戻っていない）」
生存本能のみが働いて、この場から逃げ出す。その途中、何かにつまずく。
ジム「？（本能と理性、そのない交ぜ）」
非常時の防空壕用である地下への扉が、なぜか半開きになっている。
そこから、何とも言えない不快な音が、異臭と共に漂い出ている。
ジム「…（逃げられない）」
鼻を押さえながら、銃の先で扉を上げるジム。
ジム「！（瞬間に、激しい嘔吐に襲われる）」
自治区の民たち、仲間たち、集落の友人たち。その無数の死。
大量の死骸が、ゴミのように無造作に捨てられている。
その一番手前に、カナクの後姿がある。
ジム「～（泣く）」
泣き震えながらカナクを抱き上げるジム。人形のようなカナクの身体を抱き寄せ、顔を拭ってやる。
その下で、カナクの手がジムのナイフに伸びる。
ジム「？（ゆっくりした動作で）」
脇にナイフが刺さる。ジムはようやく気付く。
偽装死だったカナクの目が、無表情のままギラついて自分を見ていることに。
狂い咲くジムの悲鳴。再び生存本能だけになったジムは、コムドを腕に抱えたまま外へ逃げる。
カナク「…（静かに、無表情に立ち上がる）」
銃を拾い、ジムの後を追うカナク。
○～広場（夕）
這うように必死に逃げてくるジム。
腕に抱いたコムドが邪魔になり、通りに捨てて更に逃げる。
ジム「！（動きが止まる）」
理性が戻ったかのように、捨てたコムドの骸を拾おうと引き返す。

そこへカナクの銃撃がくる。
ジム「ヒィッ（逃げる）」
無表情に追ってくるカナクから逃げに逃げて、広場に辿り着くジム。
水呑場まで来て、井戸の足元を掘り返し、何かのコードを引きずり出す。脇からの出血が止まらない。
腕を伝い落ちる自分の血で指先が滑りながらも、コードとプラグをつなぎ、スイッチを手にする。
ジム「…（滂沱状態で全身から力が抜ける）」
仰向けになる。いつの間にか真正面に仁王立ちしているカナクが、自分へ銃口を向けている。
その銃口を見据え、目を閉じるジム。涙だけが、とめどなく流れ続ける。
ジム「…（何も、起こらない）？」
目を開ける。
カナクが震えている。表情は変わらないが、銃口をジムに向けたまま、撃てずに震えている。
最後の理性か？
ジム「（穏かに）カナク…」
カナク「（感情が欠如している）ジム…」
見つめ合う。時が止まる。
ジム「…（声すら出ず、手を差し伸べる）」
カナクが何者かに背後から撃たれる。至近距離からの連続被弾に、カナクは激しく地面に激突する。
全身からおびただしい血が流れ出す母親を背後から見下ろしているのは、能面の如きジェイだ。
ジム「…（もう感情がうまく働かない）ジェイコブ…」
ジェイがジムの方へ足を踏み出す。
カナクはジェイに銃を向ける。瀕死状態で、ほとんど本能だけで動いている。
ジェイ「…（ためらいなく撃つ）」
ライフルの連射が、カナクをただの肉片へと変える。
顔を庇ったカナクの眼球や頭蓋欠片が、ジムの足元に転がり落ちる。
ジムの目は、辛うじてその動きを追っている。
ジム「・・・・（もう反応できない）」
ジェイの銃口が、父ジムを狙う。
ジェイ「・・・・」
ジム「・・・・」
無意識に動いたジムの手が、カナクの手から銃を取る。訓練を身体が覚えていただけのようにも見える。
銃口を向け合うジムとジェイ。
父と息子。父は穏かな笑みを浮かべ、息子は無表情に引金を引く。
父は眉間を撃ち抜かれて斃れ、息子も心臓を撃たれて絶命する。
遠くに夕陽が沈んでゆく。
○自治区領内・一夜明けた黎明
敵大国側の特殊部隊が事後処理をしている。大気の管理に余念がない。
全員が宇宙服のような完全密閉型の防護服を着用して二次感染を防いでいる。
指揮するロッシの元に、部下が来る。
部下「大気が正常値に戻りました」
ロッシが防護服を脱ぐ。

ロッシ「時間がかかり過ぎだ。バイオ・ハザード対処訓練を増やしておけ」
　　身なりを整えて兵舎へ入って行く。
○同・兵舎内作戦室（黎明）
　　ロッシが入ると、ユンが丁重に迎える。
ユン「作戦成功、おめでとうございます」
ロッシ「（上機嫌）ありがとう、ユン准将」
　　用意されていたワイングラスを手に、
ロッシ「乾杯」
ユン「乾杯（一気に飲む）」
フェランキ「乾杯。念願が叶いましたね」
　　ロッシが振り返ると、フェランキが微笑を浮かべて立っている。
　　フェランキは、全く普通の様子であり、夢游状態は演技だったとわかる。
ロッシ「君もな。よくやった」
フェランキ「（平然）ありがとうございます」
ユン「それにしても素晴らしい兵器ですな。味方の損害が全くないとは。正に理想です」
ロッシ「確かに。だが、感染してからの潜伏期間が思ったより長いな。最後に町に入った３人の内、２人は発症しないうちに死んでいる」
ユン「おぉそうだ、その最後の１人、良く知ってる男でしてね。いや、知っていたというべきか。ちょっと見に行きませんか」
　　ロッシやフェランキを連れて外へ行く。
○同・広場（黎明～）
　　微かに朝の陽光が差し込み始めている。美しくさえある朝の光景。
　　そこに、ジムが銃を握ったまま斃れている。
　　カナクやジェイが基地へ収容されていく中、ユンとロッシがやって来る。
　　フェランキがジムの生死を確認する。
フェランキ「…確かに、死んでる」
ユン「伝説の傭兵、ガイ・ヨドルの息子です」
ロッシ「…（忌々しげに）こいつが最後か」
ユン「惜しい男でした。私は好きでしたよ」
ロッシ「しかし、最後には自分の息子を撃った。感情をなくして、そして殺した」
ユン「所詮、人間ですから」
フェランキ「（狡猾な笑み）准将はなぜコイツらを？　役に立ってたんでしょう」
ユン「力を持った身内や部下は、敵より始末が悪い。古来の鉄則だよ」
ロッシ「しかし、買い手が問題だな。この手の兵器は世論がうるさい」
ユン「問題ないでしょう」
ロッシ「ほう、軽くおっしゃる？」
ユン「実験さえ極秘裏に出来れば、ね。後は相手を選ばせればいいだけです」
フェランキ「相手？」
ユン「例えばテロリスト。例えば麻薬カルテル。下手に軍を投入しても片付きません。そこでコイツの出番です。彼らが相手なら、国際世論は味方してくれますから」
　　高説をぶって愉快に笑うユン。

その目の前で、突然ジムの両眼がカッと見開く。

ユン「ヒッ！（極端に怯える）」

ユンを見据えて離さないジムの鋭い眼光は、瞳孔が完全に開いている。

フェランキ「（ホッとして）単なる生体反応です。死後硬直が解けたんだ」

ロッシ「（部下に）さっさと片付けろ！」

ユンが怯えた自分を取り繕っているのを横目に、鼻を鳴らすロッシ。

フェランキ「ン？」

血まみれのジムの拳に、何かが握られているのに気づく。

掌を開けてみるフェランキ。その時、ジムの手の中にあったスイッチを誤って押してしまう。

フェランキ「！」

水香場の地下に仕掛けられていた爆薬が点火した。

大量の爆薬による、地底からの巨大な地響き。

大規模の爆発が、広場全体を地上から吹き飛ばす。

○元・自治区領内

丘の上。石像が、民間の土木業者の手で撤去されてゆく。

Ｎ「この日、一つの自治区が地図から消え、二十三の少数民族が地上から消えた」

石像の亀裂は、更に深くなり、さながら号泣しているように見える。

了